

『英米文化』 52, 23–37 (2022)
ISSN: 0917–3536

『二都物語』 にみる情報伝達速度
—18世紀と19世紀の技術格差から

原 田 昂

The Speed of Communication in *A Tale of Two Cities*:
The Technological Difference between the Eighteenth and
Nineteenth Centuries

HARADA Takashi

Abstract

Recent studies have indicated that *A Tale of Two Cities* depicts the French Revolution as a critical period in which information technologies had developed and information transmission had accelerated and that it thereby represents the idea that social changes and technological development are inseparable. Those studies, however, have paid little attention to the end of Book 2 and the beginning of Book 3 of the work. These chapters clearly illustrate the impact of the means of communication on people's lives, making them the most significant part of this work of fiction in regard to its consciousness of communication. This paper verifies that the aforementioned chapters are crucial for comprehending the understanding of the media presented in this work. This study first focuses on the dates of events in which those chapters progress. The time they span is sufficient to deliver messages from Paris to London by telegraph but is not long enough to do so without electric wires. It then reaffirms the meaning of the dates by examining the fact that Charles Dickens had set this scene in winter before changing his manuscript. Finally, it analyses Darnay's travel across the English Channel, which is repeatedly impeded, to clarify that this novel delineates the substantial gap of communication between the eighteenth and nineteenth centuries.

序論

チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens) は、1850年に『家庭の言葉』(*Household Words*) を、1859年には『一年中』(*All the Year Round*) を、それぞれ週刊雑誌として創刊した。これら2誌の刊行が始まった1850年代は、ヨーロッパの報道史においてそれまでとは異なる特派員が登場し、読者の注目を集めた時代だ。ディケンズも雑誌編集者として特派員たちを派遣し、国内外のニュースや旅行記を掲載した。

しかし忘れてはならないのは、報道記者たちが1850年代に偶然、揃って新しい手法を採用したわけではないということだ。新しい特派員が登場するためには、情報を伝えるための技術が発達する必要があった。ジョン・ドリユー (John Drew) が “Omnibus conducting, train driving, electrical conduction, telegraphic signalling: all can become, in the *Household Words* and *All the Year Round* imaginary analogues for magazine editing” と言うのは決して大げさではない (307)。遠方に派遣された特派員たちがロンドンのオフィスにいる編集者ディケンズに情報を伝える過程には、電気信号の速さで離れた場所に情報を伝える電信が不可欠であったし、電信局から主要な鉄道駅へ、駅から路地へとメッセージを伝える交通手段が必要であった。

このように考えると1850年代以前とそれ以降は、新しい特派員の登場前後としてだけでなく、情報伝達速度の発達段階における一区分としても捉えることができる。筆者は「*A Tale of Two Cities*において物語化される体験と群衆形成—19世紀の報道特派員の手法をめぐって」の中で、ディケンズが1859年に発表した『二都物語』(*A Tale of Two Cities*) における情報伝達に、1850年代以降に活躍した特派員の手法が使われていることを指摘した¹。特派員の手法を熟知していた作家は、極めて効果的な情報伝達手段として現実世界の19世紀に用いられた手法を、物語世界の18世紀において利用したのだ。しかし、新しい特派員の登場には情報伝達速度の向上が不可欠である以上、本作品を新しい情報伝達手法と結びつけて読むためには、本作品における情報速度の描写にも注目しなければならない。

先に挙げた筆者の論文では、本作品の中で特派員の手法が使われていることを指摘しているが、それらは全て当事者同士が直に情報交換を行う場面、つまり18世紀

と19世紀の情報伝達速度の差を無視できる環境においてのことだ。一方、作品出版当時と物語内というおよそ1世紀離れた2つの時代における情報伝達速度の差が無視できない場面は、前掲の筆者論文では扱っていない。もしも本作品が18世紀と19世紀における情報伝達速度の差を適切に表現していないとすれば、先に挙げた論文で筆者が指摘した点は単なる偶然と言う他ない。そこで本稿では、『二都物語』が情報伝達速度についての正確な理解に基づいて書かれた作品であることを明らかにする。

情報伝達速度に注目して『二都物語』を読み解く試みはこれまでも行われてきた。例えばリチャード・メンケ (Richard Menke) は、本作品を情報革命の起こりを描いたものと捉え“Dickens was fascinated by modern information flows. In its impulse to historicize media systems, its focus on the movement of texts and persons, and its vision of how reality might register as information, *A Tale of Two Cities* is a historical novel for a new information epoch”と主張する (107)。ジョナサン・グロスマン (Jonathan H. Grossman) もメンケに賛同し、自らの目的を“to see Dickens’s history as defined by historical changes in transportation”だと宣言する (182)。両者の共通点は以下の3点にまとめられる。まずこの2人は、緻密な分析によって本作品を情報伝達と関連付けて読むことの重要性を示している。また両者は共に、本作品におけるフランス革命を情報伝達手段や速度、あるいはそれらに規定される社会のあり方が変化する瞬間だと捉えている。そして最後に彼らは揃って、物語冒頭で描かれるドーヴァー～カレー間の移動には大いに注目する一方で、本作品の第2部終わりから第3部始めにかけて描かれるドーヴァー～カレー間の移動にはあまり注意を払わない。もっともグロスマンは第3部冒頭について部分的に言及しているが、しかし本作品と情報伝達の関係性を考えると、この場面が持つ重要性を十分に示しているとは言い難い。この場面において英仏間の情報伝達拠点として機能するテルソン銀行と、海峡を超えて英仏間を移動するチャールズ・ダーネイ (Charles Darnay) は、情報伝達手段が未発達な時代を象徴するものであり、情報伝達という視点から本作品を読む上で決して無視することのできない役割を果たしている。

『二都物語』を情報伝達速度という視点から読むために、本稿はまず第2部の終

わりから第3部の始まりにおける物語中の日付に注目する。この場面では他の場面と異なり、日付が正確に設定されている。このことがこの場面における情報伝達を、19世紀から見ると前時代的なものになっている。続いて本稿は、第2部終わりから第3部にかけての物語内の日付がディケンズの草稿では異なる時期であったことに焦点を当てる。ディケンズ自身は草稿を変更した理由を語っていないため確かな理由を知ることはできないものの、その変更理由は情報伝達速度という視点から十分に説明される。最後に本研究は、同場面においてドーヴァー海峡を超えてパリへ向かうダーネイの移動を分析する。この移動は、徹底してその遅さと往復不可能な旅であることが強調される。この事実は、情報の伝達が人間の身体的移動に依存していた時代において、情報伝達もまた遅くて不自由なものであったことを示す。

1. 『二都物語』における日付の設定と電信以前の情報伝達

本作品では度々、西暦何年の何月に起きた出来事が語られているのか言及される。しかし第2部終わりから第3部初めにかけては特別に、何日の出来事が語られているのかまで明らかにされる²。その理由の1つはおそらく、この箇所が物語内においても現実の歴史においても、数日の間に状況が大きく変化する時期だからであろう。例えば物語の中では、ダーネイがかつての使用人ギャベール(Gabelle)を救出するために、ロンドンを発ってパリへと向かったのが1792年8月14日のことである。同じ日にフランスでは、亡命者の扱いに関する法律が施行され³、この法律に従ってフランスへ帰国したダーネイは投獄される。その後ダーネイの身を案じてロンドンを発ったマネット父子がテルソン銀行パリ支店に到着したのが9月3日のことで、ダーネイを救出すべくラフォルス監獄へ赴いたマネット医師が戻ってきたのがその4日後だということが、作中でははっきりと明かされている。一方現実の歴史においても、1792年8月10日に革命家たちがテュイルリー宮殿を襲撃して国王一家を捕らえたことを皮切りに、国王の幽閉、特別裁判所の設置など次々と状況が変化した。

しかしこの場面で日付が明らかにされていることは、まだ電信が実用化されてい

ない18世紀において、英仏間の情報伝達に時間がかかったことを強調している。ダーネイはフランスへ発つ直前まで、ロンドンのテルソン銀行にいた。フランス革命勃発後のテルソン銀行は、情報拠点として機能している。そこは“[T]he headquarters and great gathering-place of Monseigneur, in London, was Tellson's Bank”とある通り人が集まる場所であり(178)、危険を察知していたフランス貴族たちが“provident remittances to Tellson's”をしていたことから金が集まる場所であり(178)、“[Tellson's] was the spot to which such French intelligence as was most to be relied upon, came quickest”と書かれるように最も信頼できる情報が最も速く伝えられる場所であった(178)。またダーネイの行方を知らぬギャベールが、“the great bank of Tilson [Tellson] known at Paris”ならばダーネイに手紙を転送してくれるに違いないと信じて手紙を託していることから(182)、この銀行が物品の集積・中継地点であったことも示唆される。このように人、金、物が集まる場所であり、それゆえに情報が集まる拠点でもあったテルソン銀行は、商人や商品の存在こそ見られないものの、ロンドンの王立取引所さながらの役割を果たしている。語り手も“Tellson's was at that time, as to French intelligence, a kind of High Exchange”というように(178)、テルソン銀行と王立取引所の類似性に言及している⁴。

英仏間の情報交換を担い、しかも王立取引所に重ね合わせられることから、テルソン銀行は現実世界におけるロイター通信社を想起させる。ポール・ロイター(Paul Reuter)は1851年10月にロンドンの王立取引所に通信社を設立すると、その翌月に開通したドーヴァー〜カレー間を結ぶ電信線を使って、情報の収集および伝達を開始した。ジェイムズ・グラント(James Grant)が書き残したロイターとの対談にもある通り、ロイターは電信を使うことでイングランドの新聞社に“earlier and more accurate intelligence of importance”を提供した(325)。同様に物語の中ではテルソン銀行が、フランスの情報が素早く正確に伝わるロンドンの「取引所」として機能する。テルソン銀行は集めた情報を、新聞社に売ることにはなかったものの、“Tellson's sometimes wrote the latest news out in a line or so and posted it in the Bank windows, for all who ran through Temple Bar to read”とあるように(178)、不特定多数に向けて公開している。まるで新聞社がヘッドラインを窓に貼り出すかのように、テルソン

銀行もまた窓にニュースを掲載していることから、テルソン銀行は通信社と新聞社を兼ねた役割を担っているのかもしれない。いずれにせよテルソン銀行が、作中年代時点というよりも作品出版当時の現実世界における報道機関に似た機能を持っていることは間違いない。

しかし上に引用した箇所は同時に、現実世界の19世紀におけるロイター通信社と、物語世界の18世紀におけるテルソン銀行の最大の違いをも示している。それは、情報伝達手段の違いに基づく情報伝達速度の差だ。物語の中でテルソン銀行は最新の情報を並べて(“in a line”)貼り出しているが(178)、現実世界のロイター通信社とは異なり、電信線によって(by a telegraph line)最新の情報を仕入れることはなかった。この違いは物語の中で、テルソン銀行に伝わる情報の遅さによって強調される。物語内でダーネイがパリへ向かったのは1792年8月14日のことである。先述の通り、ダーネイはこの日ロンドンのテルソン銀行におり、そこで得た情報を基にフランス行きを決心した。現実の歴史ではその4日前、8月10日に革命家たちがテュイルリー宮殿を襲撃してフランス国王一家を捕らえている。描写こそされないものの、物語世界においても現実世界と同様8月10日事件は起きたようで、ルイ16世とマリー・アントワネットは捕まっている。しかしフランス国王捕縛の報は8月14日になってもロンドンのテルソン銀行に届くことはなく、ダーネイはパリ到着から数日後、パリの城壁からラフォルス監獄へ移動する途中で“The few words that he caught... first made it known to Charles Darnay that the king was in prison”とあるように(192)、初めて国王の投獄を知った。もしもこの時点で電信が実用化されていたとしたら、事情は違ったはずである。ポール・レヴィンソン(Paul Levinson)によると、イングランドでは電信を唯一の情報伝達手段とする報道は、1858年に初めて行われた(55)。そしてこの時、フランスからドーヴァー海峡を超えて情報が伝えられ、イングランド内で新聞が発行されるまでにかかった時間は“a few minutes to transmit and decode, a few hours to be printed in the press”であった(55)。『二都物語』の出版前年には、現実世界では電信を用いることで、数時間の内に情報の伝達のみならず印刷まで終えられたのだ。一方電信が実用化されていない作中では、ほとんど同じ距離間の通信であっても、4日間をかけて情報を伝えることさえできない。

以上の通り、第2部終わりから第3部にかけてテルソン銀行はフランスからあらゆるものが集まるイングランド内の情報拠点として機能する。しかし、この場面では他の場面と違って物語中の日付が詳細に設定されていることによって、テルソン銀行は電信なき時代においては迅速に情報が伝えられる場所であると同時に、電信が実用化された時代から見れば情報伝達に時間のかかる場所であるという、相反する性質を持った場として描かれる。

2. ディケンズによる草稿の変更—情報伝達速度への意識

前節で確認した通り、『二都物語』の一部において特別に年月日が明かされることは、電信以前の時代における情報伝達速度の遅さを示している。それは決して偶然ではなく、作家が情報伝達速度に関心を抱き、草稿を変更したからである。

ダーネイが1792年8月14日に、18世紀の情報伝達速度の遅さゆえ4日前に起きた事件について何も知らぬまま、ロンドンを発ったことは既に言及した通りだ。しかし興味深いことに、ディケンズの草稿ではダーネイの出立時期は異なっていた。サンダーズの調査によると、原案の時点ではダーネイがフランスへ出発するのは1792年12月のことであり(126)、ダーネイがフランス国内を陸路で進む第3部第1章は1793年1月のことであった(134)。サンダーズはこの変更の理由を“in order to date Darnay's departure to the dangerous period between the siege of the Tuileries on 10 August and the defeat of the French armies at Longwy on 29 August”と考える(133)。サンダーズの推測はおそらく正しいだろう。ディケンズの原案通り12月になってからダーネイがフランス行きを考えるとすれば、いかに人情や正義感に突き動かされようとも、フランスに入国すれば自身がどのような目に合うかダーネイにもよく理解できるはずである。一方、国王が捕まるよりも前にダーネイがフランスに入国するよう草稿が修正されていたとしたら、ダーネイが亡命貴族として拘束されることはなく、物語は全く異なる展開になっていたことだろう。つまり物語の構成上、ダーネイがフランス行きに危機感を覚えることなく、同時にダーネイのフランス行きが受難の旅となる最適な時期が、サンダーズが言及している期間なのである。

しかしサンダーズの説明では、ダーネイの出立が 8 月 10 日ではない理由を説明できていない。上に挙げた条件を満たすよう草稿を修正するだけならば、ちょうどテュイルリー宮殿襲撃の日にダーネイを出発させれば良い。実際本作品の第 2 部第 21 章では、ロンドンでジャービス・ロリー (Jarvis Lorry) がダーネイらと話しているまさにその時、語り手の視点がロンドンからパリへと一瞬で切り替わり、バステューユ牢獄襲撃が始まるという構成になっている。それにもかかわらず、バステューユ牢獄襲撃と同じくフランス革命期における重大事件である 8 月 10 日事件からダーネイのパリ行きまでには 4 日間の時間差が設けられる。これら 2 つの場面に見られる違いは、単純に物語の都合というだけでは説明がつかない。

これは、4 日間をかけても非常事態を伝える報がドーヴァー海峡を超えられないという情報伝達の遅さを強調する狙いに他ならない。注目すべきことに第 2 部第 21 章では、“On a night in mid-July, one thousand seven hundred and eighty-nine” と書かれるだけで (161)、何日の出来事であるかは言及されない。この場面では、バステューユ牢獄襲撃の速報がロンドンにいる人物たちの耳に入ることに何の意味もない。確かに勤め先がパリに支店を持つロリーにとってはパリの情報は重要かもしれないが、しかしこの時点では誰もパリに赴く予定も必要性もなく、パリがにわかには危険な場所になったからといってロンドンに住む人々には特別な影響はない。このような場合速報性は必要とされないし、ロンドンに情報が届いたか否かは物語の筋とは全く無関係である。だからこそロンドンの描写とパリの描写の間に時間差は必要ないし、それが具体的に何日の出来事であるかも言及する必要はない。対照的にダーネイのパリ行きの場面では、パリの危険性がロンドンにおいて知られているか否かは重大な問題である。だから、何日にパリで事件が起き、何日にダーネイがロンドンを発ったのか言及する必要がある。もちろん上述したバステューユ牢獄襲撃の瞬間と同じ様に、ロンドンにおけるダーネイの行動とフランスにおける重大事件が同時に起きたとすることもできたはずである。しかしそれでは、ダーネイがテュイルリー宮殿襲撃を知らないのは当然のことだ。ディケンズがなぜ特別 4 日間という期間を選んだかは定かではないが⁵、この期間は作品出版当時の読者からすればパリの情報が当然届いているはずの期間であり、一方作品内の時代である 18 世紀に

においては、基本的には海峡を超えて情報を伝えることができなかつた期間である⁶。このように、本作品の第2部終わりから第3部初めにかけて施された修正は、ただプロットの整合性を保つだけでなく、物語の内と外の2つの異なる時代における情報伝達速度の違いを正確に示すためのものでもある。

3. 18世紀における情報伝達と身体的移動

本稿ではこれまで、パリで起きた8月10日事件についてのニュースが4日後になってもロンドンに届いていないことを中心として、『二都物語』が18世紀における情報伝達の遅さを意識的に描いていることを論じてきた。これに加えて、本作品が物語内部と作品出版当時の現実世界における情報伝達速度の差を表現していることを明らかにするためには、本作品が18世紀の情報伝達手段を描写する方法を検証する必要がある。本作品の第2部終わりから第3部初めにおいては、海峡を超えるための情報伝達手段が描かれている。物語の中では英仏間を移動するのに要した時間は明らかにされないものの、未だ電信が実用化されていない時代において、手紙であれ口伝えであれ、情報が伝えられるためには原則として人間の移動が必要であった。そして人間が移動するための手段も18世紀と19世紀では大きく異なっていたし、ディケンズは注意深くその差に言及している。

現実世界の19世紀では蒸気エンジンを搭載した鉄道や船が実用化され、自然の影響を受けない、定時性をもった交通手段が発達した。当然英仏間の海峡も蒸気船で移動が可能となったし、ドーヴァー海峡の海底に電信線を敷設したのも蒸気船であった。一方18世紀時点の旅行者たちは、英仏間の移動を風に委ねる他なかつた。この事実を強調するかのようにディケンズは、第2部第24章においてダーネイがフランス行きを決心すると“Like the mariner in the old story, the winds and streams had driven him [Darnay] within the influence of the Loadstone Rock”と書いているし(183)、実際にダーネイがロンドンを発った際には“The unseen force was drawing him fast to itself, now, and all the tides and winds were setting straight and strong towards it”と書いている(185)。どちらの記述でも、ロンドンからパリへとダーネイを運ぶ力は風と潮

である。しかも彼の行為は「古い物語 (“the old story)”」である『千夜一夜物語』の1話になぞらえられている。これはまず、父の跡を継いで王になった男が船旅の途中磁石の島に引き寄せられたという『千夜一夜物語』の話と、侯爵であった叔父の死後危険なフランスへ引き寄せられるダーネイの姿を重ね合わせることが目的であろう。しかし同時に、“old”の1語と船の動力への言及は、作品出版当時から見た帆船の古さを強調している⁷。さらに彼を突き動かす「見えない力 (“unseen force)”」は、心的な力への言及であることは疑いの余地がないが、同時に19世紀の蒸気エンジンとは異なり、目には見えない自然の力を指しているようにも思われる。

移動に時間がかかるのは海上に限った話ではない。フランスに到着したダーネイがまず直面したのは、“bad roads, bad equipages, and bad horses”であった(185)。もっとも、悪路についてはディケンズの勘違いである可能性が高い。というのもフランスではこの時代よりも前から、ルイ15世によって一定時間の道路整備が庶民に課せられており、道はある程度整っていたからだ。1787年にフランスを旅したイングランドの農学者アーサー・ヤング (Arthur Young) は、カレーに近いサメール周辺の道路について “If the French have not husbandry to show us, they have roads; nothing can be more beautiful... and indeed for the whole way from Samer it is wonderfully formed: a vast causeway, with hills cut to level vales” と記録している (9)。例外的にヤングは、パリに到着した際は道路を “a perfect desert” と表現しているし (13)、パリの中心地へ移動する際には “narrow, ugly, and crowded streets” を通ったと記す (13)。だがダーネイが「悪路」を通ったのはパリ内部やその周辺でのことではない。だからこの場面における道路の状態については、必ずしも現実の歴史的事実とは合致していないと考えるのが自然だろう。

しかし重要なことは、ディケンズが18世紀フランスの道路事情を正確に知っていたか否かではなく、またディケンズが物語中の道路を現実そっくりを描いたか否かでもなく、作品の中では悪路によってダーネイの移動が遅れている事実である。後述する通りダーネイの移動を遅らせる要因は他にもあるし、むしろ他の要因の方がより移動を遅らせる力を発揮する。それと比べると、たった2語しか記述されていない悪路の情報は不要とさえ思われる。それにもかかわらずこの場面で悪路につい

て言及されるのは、フランス国内における身体的移動の遅さを、徹底的に強調するためだと考えられる。

ダーネイの旅路を邪魔するものは交通手段だけではない。彼が進む地はまさに革命下であり、そこでは“[C]itizen-patriots... stopped all comers and goers, cross-questioned them, inspected their papers, looked for their names in lists of their own, turned them back, or sent them on, or stopped them and laid them in hold”とあるように (185), 「市民」たちが全ての通行人を一時的に止めるだけでなく、質問や調査に時間をかけ、場合によっては拘束さえした。もちろんダーネイも例外ではなく、“The universal watchfulness not only stopped him on the highway twenty times in a stage, but retarded his progress twenty times in a day, by riding after him and taking him back, riding before him and stopping him by anticipation, riding with him and keeping him in charge”と言及されるように (186), 一時的に足を止められるだけでなく、追跡や先回りなど様々な方法でダーネイの移動が遅らせられることが明示される。

フランス国内における身体的移動の遅さは、「市民」たちによる直接的な妨害の描写だけでなく、扉や門という比喩的、象徴的な表現によっても示される。ダーネイはフランスに上陸するとすぐに、自身が通ってきた旅路が“iron door in the series that was barred between him and England”であることを悟る (186)。実際には彼が通った道はどこも閉じられていないのだが、執拗に移動を妨げられる状況を考えれば、再びフランスを出国してイングランドへ向かうための帰路は鉄の扉で閉じられているも同然である。その後も旅の道中、ポーヴェではダーネイが亡命貴族であることが露見し、彼の周りに群衆が押しかける。ここでは“[T]he postmaster shut and barred the crazy double gates”とあるように (187), 宿駅の主人がダーネイと群衆の間で門を閉める。一見するとこの門はダーネイを群衆の暴力から守る役割を果たしているが、同時にこの門は元貴族であるダーネイに後戻りすることを許さない障害でもある。この場面の後ダーネイが向かうのはパリの城壁である。そこでは“[T]he gate was held by a mixed guard of soldiers and patriots”とある通り門が嚴重に警備され (188), “[W]hile ingress into the city... was easy enough, egress, even for the homeliest people, was very difficult”と書かれるように (188-89), 一度この門を通れば外国へ逃げた元

貴族が戻ってくることは困難を極めることであろうことは想像に難くない。事実、この門をくぐった後ダーネイはラフォルス監獄に投獄される。看守に連れられてラフォルス監獄の廊下を歩く途中でも、“many doors clanging and locking behind him”とあるようにダーネイの背後でたくさんの扉が閉まり（193）、他の囚人がいる場所とダーネイの独房がある場所は看守によって閉じられた“the grated door”で隔てられる（194）。このように本作品の第3部冒頭では、ダーネイがフランス国内で移動すればするほどその背後でたくさんの門や扉が閉じられ、彼が後戻りすることを妨げる。

以上の通りダーネイの身体的移動によるパリ行きは、未発達な交通手段と革命によってその進行を遅らせられる。しかも、遅いながら進むことができたとしても、再びロンドンに戻ることはほとんど不可能であることが、繰り返し用いられる閉じた扉のイメージによって強調される。もちろんダーネイは国外に移り住んだ貴族という特殊な事情を抱えてはいるものの、悪路、革命家たちによる検問、国外へ移動することの困難さはいずれも、フランス国内を移動する者ならば誰しもが避けることのできない障害だ。つまり本作品の第3部冒頭は、ダーネイの受難を描きながら、同時に作品内の18世紀末フランスにおける人の移動の遅さを描く箇所でもある。そして身体的移動と情報の移動がほとんど不可分な時代背景を考慮すると、この場面は情報伝達速度の遅さをも表現している。

結論

以上の通り、『二都物語』第2部終わりから第3部初めに渡る数章は、本作品が18世紀の情報伝達速度についての深い理解と強い関心に基づいて書かれた作品であることを示している。この箇所ではまず、特別に作中の年月日が明言されている。この日付は、登場人物が自身の行動計画に大きく関わる歴史上の重大事件を伝え聞くことができるのが、18世紀の情報伝達速度では彼の行動よりも僅かに遅れるよう設定されている。しかもその日付は、電信が実用化された時代であれば登場人物が速報を知ることができるよう設定されており、その点でも本作品の情報速度に対す

る意識を表している。これは決して作家の気まぐれではない。なぜならディケンズは登場人物の行動が情報伝達速度に左右されるよう自身の草稿に修正を加えているし、他の箇所と違って歴史上の事件と物語の登場人物の行動に時間差が設けられているからだ。さらに日付だけでなく、情報を伝えるための手段と速度の関係性にも本作品は注意を払っている。電気通信が実用化される以前には、情報の移動は人間の移動とほとんど不可分であった。本作品の第3部冒頭では、海峡を超えてフランスへ移動するダーネイの旅が自然、路面の状態、革命家たちによって遅らせられ、しかも再びイングランドへ戻ることが困難であることが繰り返し言及される。

このように本作品は、情報伝達速度についての正確な理解に基づいて書かれている。この事実は本作品を、情報伝達速度の向上に伴って登場した、1850年代の特派員との関係性から読み解く上でも重要である。

(謝辞：本研究はJSPS科研費21K12959の助成を受けたものです。)

注

- 1 筆者は同論文において、『二都物語』の中で「誰かによって語られる個人的な経験が群衆の形成に決定的な役割を果たしている」ことに焦点を当てた(原田2)。またその個人的な経験の語り⁸が、現実世界における特派員の手法と類似している点を指摘した。
- 2 この箇所の他に本作品中で年月日が全て明らかにされるのは、マネット (Manette) 医師が書き残した手記の中だけである。
- 3 アンドリュー・サンダーズ (Andrew Sanders) が指摘している通り現実の歴史上でこの法律が施行されたのは1793年のことであり (135)、1792年8月14日に同法が有効となったのは『二都物語』内部の話である。
- 4 “High Exchange” という表現についてはサンダーズが “Tellson’s has come to resemble an Exchange or Bourse, a meeting-place for merchants and bankers where business can be transacted” と説明しており (129)、その例として “The Royal Exchange in London” を挙げている (129)。
- 5 実際に現実世界では、1792年8月14日にカンタベリーで発行された *Kentish Gazette* が⁸ 8月10日事件について報道している。本紙の “Game Licences” と題された記事には、“*Extract of a letter from Dover, dated Aug. 13, twelve at night—Received at seven this morning. ‘A vessel*

is this moment arrived from Calais, which confirms the news received this morning from Paris. The King is certainly dethroned” とある (4)。この報がドーヴァーと新聞社に届いた時刻がそれぞれ明示されており、このニュースが速報として掲載されたことは疑いの余地がない。物語の中でも情報伝達に同様の時間がかかっているとすれば、8月14日はロンドンにいたダーネイがわずかな時間差でこの情報を聞き逃した絶妙なタイミングである。ただし、ディケンズが『二都物語』の執筆に際してこの新聞を確認したかどうかは不明であり、また物語世界におけるフランス革命が現実世界のものと同じスケジュールで行ったかどうかは不明であるため、ダーネイのバリ行きが8月14日に改められた確実な理由をこの新聞記事に求めることはできない。

- 6 基本的には、というのは伝書鳩を使った情報伝達は18世紀既に使われていたし、この情報伝達方法は人間の身体的移動を必要とせず、迅速に情報を運ぶことができたからだ。ドナルド・リード (Donald Read) によると、ロイターは伝書鳩を使ってフランスからドイツのアーヘンへ2時間で情報を伝えていた (11)。しかし4日経っても国王が捕まった知らせが届いていないところを見ると、テルソン銀行への情報伝達に伝書鳩は使われなかったと考えられる。なおこの箇所に限らず、『二都物語』において伝書鳩への言及は一切見られない。
- 7 もちろん19世紀においても帆船は使われていた。チャールズ・ハーリー (Charles Harley) は、帆船から蒸気船への移行が19世紀後半のおよそ50年間をかけて達成されたことを指摘し、“The displacement of sail by steam occurred gradually between about 1850 and the beginning of the twentieth century as technological change proceeded” と言う (215-16)。ハーリーは、この漸次的な変化の理由として蒸気船の燃料代が高額であったことを挙げ、長距離重量貨物船としての運用においては帆船のほうが有利であったこと、対照的に低コストで運用できる短距離旅客輸送においては蒸気船が有利であったことを指摘し、“The displacement of sail on short routes in the 1850s and 1860s, while sail remained dominant in very long voyages until the turn of the century, resulted” とまとめている (216)。この事実を踏まえると、ドーヴァー海峡の移動に限れば、『二都物語』出版当時に帆船は過去の移動手段であったと言える。

引用文献

Dickens, Charles. *A Tale of Two Cities*. W. W. Norton, 2020.

Drew, John. “Dickens and the Middle-class Weekly.” *Journalism and the Periodical Press in Nineteenth-Century Britain*, edited by Joanne Shattock, Cambridge UP, 2019, pp. 301-16.

- “Game Licences.” *Kentish Gazette*, 14 August 1792, p. 4. *The British Newspaper Archive*, <https://www.britishnewspaperarchive.co.uk/viewer/bl/0000235/17920814/025/0004>. Accessed 16 September 2021.
- Grant, James. *The Newspaper Press: Its Origin, Progress and Present Position*, vol. 2, Tinsley Brothers, 1871. *Google Books*, <https://books.google.co.jp/books?id=QDoCAAAAQAAJ>. Accessed 21 August 2021.
- Grossman, Jonathan H. “Two Cities Networked: The Historical Novel and Form in French Revolutionary Politics.” *Novel: Forum on Fiction*, vol. 50, no. 2, 2017, pp. 176–96.
- Harley, Charles K. “The Shift from Sailing Ships to Steamships, 1850–1890: A Study in Technological Change and Its Diffusion.” *Essays on a Mature Economy: Britain after 1840*. Edited by Donald N. McCloskey, Princeton UP, 1971, pp. 215–37.
- Levinson, Paul. *The Soft Edge: A Natural History and Future of the Information Revolution*. Routledge, 2005.
- Menke, Richard. *Telegraphic Realism*. Stanford UP, 2008.
- Read, Donald. *The Power of News: The History of Reuters*. Oxford UP, 1999.
- Sanders, Andrew. *The Companion to A Tale of Two Cities*. Helm Information, 2002.
- Young, Arthur. *Travels in France and Italy*. Everyman’s Library, 1976.
- 原田昂 「*A Tale of Two Cities*において物語化される体験と群衆形成—19世紀の報道特派員の手法をめぐって」『英米文化』第51号, 2021年, pp. 1–16.